



# 第17回 木村奈保子の 音のまにまに

5月に行なわれたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の公開リハーサル取材した木村さん。衝撃を受けるほどの音、ハーモニーをラトル氏と団員たちは会場いっぱいに放っていた。

## 芸術を身近なものにするための改革



今年は、ベルリン・フィルの指揮者として最後の年となるサー・サイモン・ラトルを間近に見たくて、学生に混じり、公開リハを見学した。

ラトル氏は、これまで2本のドキュメント映画の主人公として登場しており、あの個性的な風貌と革新的な言動は私の心に、強烈な印象を残している。

カラヤンに続くカリスマ、ラトル氏のことを語るほど私には音楽的知識がないことを先に弁明しておくが、それでも感じることはできる。

この日、音大生や在日ドイツ人の子どもたちを観客に、リハはいつとはなく始まった。

私の席は、サントリーホール1Fの最後列。演奏者の息使いも感じ取れない位置を残念に思っていたところ、ラトル氏が右手を振った瞬間、シャープで柔らかい音の矢が1本、放たれた。

まさに、一音、一撃。

ラトル氏は、すぐに音を止めたが、最初のこの音だけで衝撃が走ったのはその場にいた多くの聴取者も同じだっただろう。

何より、隣に座っていたドイツ人の子どもたちも、がやがやとわんぱくぶりをを見せていたところ、この瞬間、シーンとなった。子どもたちには、説明も牽制も必要なかったのだろう。

幼い頃から一流の音に触れさせる、それだけで文化水準が変わるのだと実感した。

さて2008年の映画「ベルリン・フィル 最高のハーモニーを求めて」で、ラトル氏は言った。

「調和こそが我々の求めるもの」

「指揮者は、オケを飛び立たせる」

世界一の楽団の演奏家たちは、もともと自己表現が苦手な性格の人々で、演奏により孤独を克服したという。そして、ラトル氏は「演奏家たちの引きこもりがちな性質の部分と、才能を開花させたいというアグレッシブな部分の二面性を引き合わせるのが大事だ」と言葉で表現した。

この日のリハーサルの曲目は、ベートーヴェン作曲『交響曲第8番 へ長調 Op.93』。

ベートーヴェンにおける人生の重要なエピソードに彩られている1812年の曲。ダイナミックなリズム感や躍動感を持つ曲であり、ドラマチックな趣がある。第4楽章は、遊び心にあふれる。

リハの途中、ラトル氏は冗談を口走っているようなシーンがあった。団員が皆、笑った。

「私が冗談を言う時は、最も真剣で、皮肉ではなくアイロニーだ」と先述の映画で話していたことを思い出した。

ラトル氏の格好をつけない話し方に、惹かれる。

無邪気な目つき、子どもっぽい笑顔が音に向かう瞬間、いっきに緊迫感が漂うのだ。

ラトル氏といえば、世の中のことは無関係な天才かとおもいきや、別のドキュメント映画でも記録されているように、エンタテイナーでもなんでもない子どもたちをダンサーに仕立てあげ、ベルリン・フィルのコンサートで共演を図るといって、大胆な試みで教育改革まで果たしてきている。てっぺんから庶民のもとへ手を差し伸べて、なんと同じステージまで引き上げる。その音楽に対する挑戦は、計り知れないエネルギーだ。

伝統を守りながら、改革を重ねる。

それは、ベルリン・フィルとラトル氏の共同作業によって、より多くの人々との接触、コミュニケーションの訴求を求め続けた永遠のテーマだ。

ベルリン・フィルは、楽団の側から指揮者を選ぶことができる代わりに、一人ひとりが、楽団経営の責任を負うことで知られている。

来年は、ベルリン・フィルに新しい指揮者が就任し、ラトル氏は新たに、ロンドン交響楽団の音楽監督に就任するという。

指揮者と楽団の最も美しい関係を築いた音楽家たちが、伝統的な音楽で目指すものは、何か？

それは優れた演奏技術、最高のハーモニーを提供しながら、実は普通の人々との距離をより縮めることであり、芸術を身近なものにするための改革なのではないだろうか。



NAHOK INFORMATION [www.nahok.com](http://www.nahok.com)

Fabric from  
Germany,  
Made in Japan



フルートバッグの新製品「H管フルート 横置きGM2」。フルートとピッコロを余裕で収納できる。